

求められる覚悟

2020年7月22日
中高宗教主事
大久保 直樹

聖書：マタイによる福音書 第10章34節-39節

³⁴「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。³⁵わたしは敵対させるために来たからである。

人をその父に、

娘を母に、

嫁をしゅうとめに。

³⁶ こうして、自分の家族の者が敵となる。

³⁷ わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。³⁸ また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。³⁹ 自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」

「イエスさまって嘘つき？」「イエスさま、これってどういうこと？」「おかしくないですか?!」と思わず言いたくなるような主イエスの言葉が出てきました。先ほどお読みしました最初の部分です。すなわち、マタイによる福音書10章34節「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。」どう考えてもおかしいと思ってしまいます。なぜならば、主イエスはこの場面の少し前のところ10章12節で、十二弟子を宣教活動の為に派遣するにあたって、具体的な語る言葉や持ち物、服装等について語る中で、次のようにおっしやっていました。「その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。」

また主イエスは今日の場面から約3年経った後に逮捕され、十字架にかけられることとなります。その逮捕される場面はこうです。弟子のユダの裏切りによって、主イエスを殺そうと計画していた祭司長や長老たちに遣わされた群衆が剣や棒を持って押し寄せてきて、主イエスが捕えられてしまいます。このことに対抗して、主イエスと共にいた者の一人が剣を抜いて、大祭司の手下に切りかかった際に、主イエスはおっしやっているのです。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」(マタイによる福音書)26章52節です。

さらには十字架の死後3日目に復活された際には、自分たちの師である主イエスが捕えられ、殺されたことにより、自分たちも同じような目に遭うことを恐れ、不安にかられて怯えながら、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた弟子たちの真ん中にお立ちになって、主イエスは次のようにもおっしやっています。「あなたがたに平和があるように。」(ヨハネによる福音書20章19節、

21 節、26 節)

これらのことから、主イエスが救い主として、平和の王としてこの世に来られたことは間違いないことのはずです。だとすれば今日与えられているみ言葉は一体どういう意味なのでしょう。 「平和ではなく、剣をもたらすために来た」という文字通りではなく、本当に言おうとしていることはどういうことなのでしょう。それはひとことで言うならば、「仕える覚悟」と言うことができると思います。敵対するたくさんの人々の中で、主イエスの弟子として、神の福音・神の教えを宣べ伝える覚悟を弟子たちに促しているのです。つまり彼らが主イエスのみ言葉やみわざに従って、神の教えを伝え広めようとするときには、多くの敵対者たちが現れる、そのときには剣に象徴されるような武器を手にした人々も少なくない。またその宣教活動をする際には、あるときは家族との繋がりがまでも後回しにしなければならないこともあろうというのです。

現在コロナの影響で放映が一旦お休みとなり、これまでに放映された分の再放送となっている某放送局の朝の連続テレビ小説。その番組中、柴咲コウさん演じる世界的オペラ歌手の双浦環が、二階堂ふみさん演じる関内音がプロの歌手を目指すときに次のように言ったのです。「子どもが死にそうになっても舞台に立つのがプロ。あなたにその覚悟はあるの？」これは、本日与えられている聖書の箇所マタイによる福音書 10 章の 35 節から 37 節に通じます。ちょっと見てみましょう。何て書いてあるでしょうか。35 節から 37 節「わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」もちろん、主イエスが家族愛を大切に思わないはずはありません。けれども弟子としての覚悟を語る時、このような強い言葉となっているのだと理解することができるのです。

では、この場面、私たち自身はどのように受け留めればよいのでしょうか。例を考えてみます。公共交通機関等で席を譲るシーン。自分が座っていて電車が駅で止まり、お年寄りが乗車されてきた。すぐに声をかけて立ち上がって「どうぞお座りください」ととっさに行動に移せない。『断られたらどうしよう』『なに、いい人ぶってるのか?』と思われても困るなどと頭の中でぐるぐる廻ってるうちに、他の人が席を譲って、どことなくほっとしている自分…というようなことが生徒・学生だけではなく大人でさえあるかも知れません。また、ゴミを拾う場面でゴミを拾えない自分って経験ありませんか?もう、6、7 年前になるでしょうか。前任校で春休み、ニュージーランドへの短期留学の引率をした際、コーディネーターの女性のご主人が、わたしを車で送迎してくださったり、街を案内してくださったりしたのですが、街中を歩いているときに落ちていた小さなゴミをさっとさきりげなく自然に拾うことのできる方で、『あぁなんて素敵な方なんだろう』『こういう人に自分もなりたいなあ』と素直に思えたのでした。ゴミを拾うことで、自分たちの住む街からゴミがなくなり、街で生活する人たちの心も、荒れることなく綺麗になっていく。ゴミくらいのことだと思ってしまうかも知れませんが、1994 年に当時のニューヨーク市長に就任したジュリアーニ氏が「犯罪の街、ニューヨーク」を「家族連れにも安心な街、ニューヨーク」に変貌させる道筋をつけたことはとても有名な話として知られています。彼が取り組んだのは地下鉄の落書きを一掃することでした。初めは「重大犯罪撲滅につながる弱腰な姿勢だ」と馬鹿にされた彼の取り組みと信念は、やがて数年間のうちに殺人、暴行、強盗といった凶悪犯罪の数を激減させることになったのです。どんな小さなこと

にも勇気と信念をもって取り組む、自らの言葉と行いに表してゆく、そんな心が大事なのです。

宮城学院が真の創立者である神によって134年前に建てられ、それぞれの時代の艱難を生き抜くことが出来ているのは、初代校長プールボー先生、初代校主押川方義先生はじめ多くの方々の祈り、そしてその祈りに基づく言葉や行いの結晶の積み重ねによるものだと思います。そしてそれはまさしく『神を畏れ、隣人を愛する』というスクール・モットーに常に立ち返ることによってのみ可能となることなのです。「グローバル」「共存・共生」という言葉が広まって久しい一方で、「自国 first」と声高に叫ぶ独善的な為政者が増えつつある混沌とした時代にあって、コロナ禍によってもたらされている様々な課題、さらには国内において東日本大震災以来、毎年のようにもたらされている台風や豪雨災害による艱難、さらには人々との繋がりの中で生じてしまう「いき苦しさ」—これは息が苦しいのではなく、まさに生きる苦しきです—。でもだからこそ、わたしたちは『神を畏れ、隣人を愛する』に立ち返り、そしてご自分の言葉と行い、命をかけてそのことをお示しくださったキリスト・イエスに立ち返るのです。今日与えられた聖書箇所では主イエス自らが弟子たちに示され、お求めになられた覚悟、その覚悟を一番心に据えて生きられたのはまさにイエス・キリストご自身です。共に賛美しました 443 番の歌詞にも主イエスの生き様が謳われています。『冠も天の座も 惜しまずに捨てて 地にくだるみ子イエスを 泊める部屋はない…』その主イエスは、馬小屋でお生まれになられます。そして『きつねには穴があり、鳥に巣はあるが、神の子の休まれる 寝床は荒野野…』。フィリピの信徒への手紙 2 章に「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピの信徒への手紙 2 章 6 節-8 節）とある通りです。

今こそ、わたしたちも主イエスのみ言葉とみわざに倣って生きる心を持ち、共に自らの言葉と行いに表す歩みを為してゆきたいと思います。